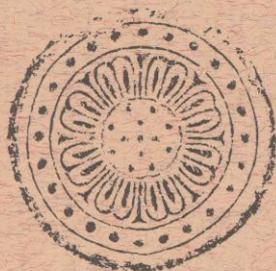


大宰府史跡

昭和47年度発掘調査略報



昭和48年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和47年度発掘調査概要

I	調査計画	(1)
II	第15次発掘調査	(3)
III	第18次発掘調査	(6)
IV	第19次発掘調査	(6)
V	第20次発掘調査	(8)
VI	第21次発掘調査	(9)
VII	第22次発掘調査	(12)
VIII	第23次発掘調査	(13)
IX	第24次発掘調査	(14)
X	第25次発掘調査	(15)

I 調査計画

大宰府史跡の昭和47年度発掘調査は5月8・9日の両日に開催された大宰府史跡発掘調査指導委員会議において、昨年度の調査結果にもとづいた発掘調査計画が討議された。しかしながら昭和43年に第1次調査を開始して以来まる4年を経過した現在、整備計画・土地の公有化等の問題を含めて長期的展望のもとに発掘計画を立案すべきであるとの意見が提出され委員会が認めるところとなったため改めて計画を練り直し7月東京・奈良・福岡の三会場にわかれて第2回指導委員会議を開催し次の地点について調査を行なうこととなった。

表1 昭和47年度発掘調査計画表

	調査地区	調査期間	調査面積	備考
1	政庁地区回廊東北隅	4月～6月	900m ²	46年度からの継続
2	〃 築垣 〃	7月～9月	1,200m ²	
3	〃 東面回廊	10月	300m ²	整備にともなうもの
4	〃 西北部	11月～1月	2,000m ²	道路移設予定地
5	緊急調査			

すなわち、昭和45年度から実施している環境整備事業と関連して47年度調査は政庁地区に重点をおきその未調査部分の遺構をあきらかにすることとした。

以上のような計画にもとずいて調査を実施した。このうち昨年度よりの継続調査であった回廊東北隅および道路移設予定地約 600m² については調査を終了した。しかしながら46年度頃から増加の傾向を示していた現状変更申請・埋蔵文化財発掘届による緊急調査は47年度においてはさらに増加し、これらの事前調査に時間をとられたため、47年度計画を大巾に変更し、見送らざるを得なかった。

昭和47年度発掘調査地区は下記の表のとおりである。

表2 昭和47年度発掘調査実施表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第15次	6 A Y T - B	1,000m ²	1972. 4. 1 ~ 1972. 9. 4
第18次	6 Z G K	610m ²	1972. 4. 1 ~ 1972. 5. 4
第19次	6 A Y L	100m ²	1972. 5. 20 ~ 1972. 6. 10
第20次	6 K K Z	130m ²	1972. 6. 3 ~ 1972. 7. 3
第21次	6 K K Z - C	150m ²	1972. 8. 2 ~ 1972. 9. 18
第22次	6 Z G K	80m ²	1972. 9. 12 ~ 1972. 10. 12
第23次	6 K K Z	240m ²	1972. 9. 28 ~ 1973. 1. 10
第24次	6 A Y T - A	600m ²	1972. 11. 25 ~ 1973. 2. 9
第25次	6 A Y I	110m ²	1973. 1. 9 ~ 1973. 1. 24

Ⅱ 第15次調査

第15次発掘調査は政庁地区においてほぼ完全な形で礎石が残存している正殿の東の部分を対象とした。地番は太宰府町大字観世音寺字大裏 525番地である。政庁地区ではこれまでに第1次調査（南門・中門）・第6次調査（回廊西南隅）の発掘調査を実施している。この両次^{註1}の調査の結果南門・中門および、これに接続する築垣・回廊の規模と相互の接続関係が明確となった。特に第6次調査によって中門から西へのびる回廊は中軸線から55.35 m（中軸線と西面回廊心の距離）・柱間数にして13間目のところで北へおれることが明らかとなった。この調査結果をもとに第15次調査では回廊の正殿付近における圍繞の状況、正殿との接続関係および、これまで推測の域をでていなかった正殿背後をとりかこむ遺構の性格を解明することを主な目的とした。調査は昭和46年10月5日に開始したが途中あいつぐ緊急調査のためやむを得ず中断せざるを得ず昭和47年9月20日に調査を終了した。

検出遺構

検出した主な遺構は回廊（新・旧二時期）・築垣・掘立柱建物2棟・石敷遺構などである。

回廊（S C 340 A・B S C 350 A・B）

北面回廊S C 340 A・B 8間分^{註3}および東面回廊 S C 350 A・B 3間分を検出した。これらの回廊は遺構の状況から西南隅同様2期に分けることができる。まずA期の北面回廊S C 340 Aと東面回廊S C 350 Aは礎石1個を残すのみで全て取り去られ根石はほぼ完全に残存していた。礎石の中心距離は桁行 3.9m（13尺）、梁行4.65m（15.5尺）で第1・第6次の調査結果と一致する。北面回廊の北側柱列の中央3間分には博を2列に敷きならべたものが検出された。壁持ち地覆と考えられる。また同回廊の最東端1間分の北面回廊中心線と東面回廊東側柱列線の交点に礎石が1個残存し、また東面回廊中心線と北面回廊北側柱列線との交点には根石が検出された。これと同じ様な礎石は第6次調査の際にも西面回廊の中心線と南面回廊南側柱列線との交点にも礎石が1個検出されており、梁行4.65mという幅広い壁に築垣が取り付くため壁の補強としてその中央に立てられた柱の礎石と考えられた。しかし、今次調査では築垣の取り付かない北面回廊の東端にもあるため、もっと別の機能を考えた方が妥当であろう。

次にB期の北面回廊 S C 340 B・東面回廊 S C 350 Bは北面回廊北側柱列の最西端の礎石1個を除いてはすべて残存している。礎石はすべて花崗岩の自然石で若干風化したものがある。礎石の心心距離は梁行・桁行とも3.90m（13尺）であり、第1次・第6次調査の結果と一致している。

しかし東面回廊が北面回廊に取り付く1間分のみは桁行が4.20m（14尺）あり広くなっている。これは当初梁行が15.5尺であったものを後に桁行に合わせて13尺に改める際北面回廊の南側柱列を北へ1尺ずらしたために生じた結果と考えられる。また東面回廊においては東側柱列

を3.5尺、西側柱列を1尺西へ移動している。このため東側柱列の礎石の中心線と基壇の側石との間隔が約2.7mと広がっている。このことは東面回廊基壇の東端がかなり攪乱されておりB期回廊の軒の出を考慮に入れていなかった結果とも推定される。

北面回廊基壇は西から東へ傾斜しており礎石の上面において約30cmのレベル差がある。また今回検出した回廊礎石の最西端の礎石上面と正殿礎石上面とのレベル差は約1.5mでかなりの差がある。基壇側石は北は大きさ20～30cmほどの石を一列にならべている。南はほとんど取り去られているが入隅部では丸瓦を2列に敷いている。おそらく後の補修であろう。東面回廊基壇の側石は人頭大の石を3～4段組んだ乱石積で深さ約80cmほどである。またこの回廊東北隅においても第6次調査で検出したものと同様の保土穴S X 353を検出した。径30cm弱の円形で周囲は赤く焼けている。この中から木炭・銅鏝を検出した。

S D 345は東の肩が不明確であるが幅約3.5mである。これは東面回廊の雨落ち溝と北方からの排水をも兼ねているものと思われる。

以上の結果をもとに今回検出した北面回廊北側柱列と第6次調査で検出した南面回廊南側柱列との距離は約117.30mとなる。これをB期の桁行3.9mで割ると $117.3 \div 3.9 = 30$ 余り0.3となり、前述の東面回廊北端の柱間4.20mの結果を総合すると丁度30間目で西へ折れることとなる。また正殿との接続関係については正殿身舎南側柱列と北面回廊の中心線とが一致した形で接続することが明らかとなった。しかし正殿の建物は正面1間が吹通しで、あとの3間は壁になることは地覆座より観察して明らかである。したがって取り付き部の回廊の半分は壁になるというきわめて変則的な構造になることが明確となった。

築垣 (S A 335)

築垣S A 335は東面回廊の東側基壇石と面を合わせて北へのびるもので、これまで不明であった正殿後方を取りかこむ施設が築垣であることが明確となった。

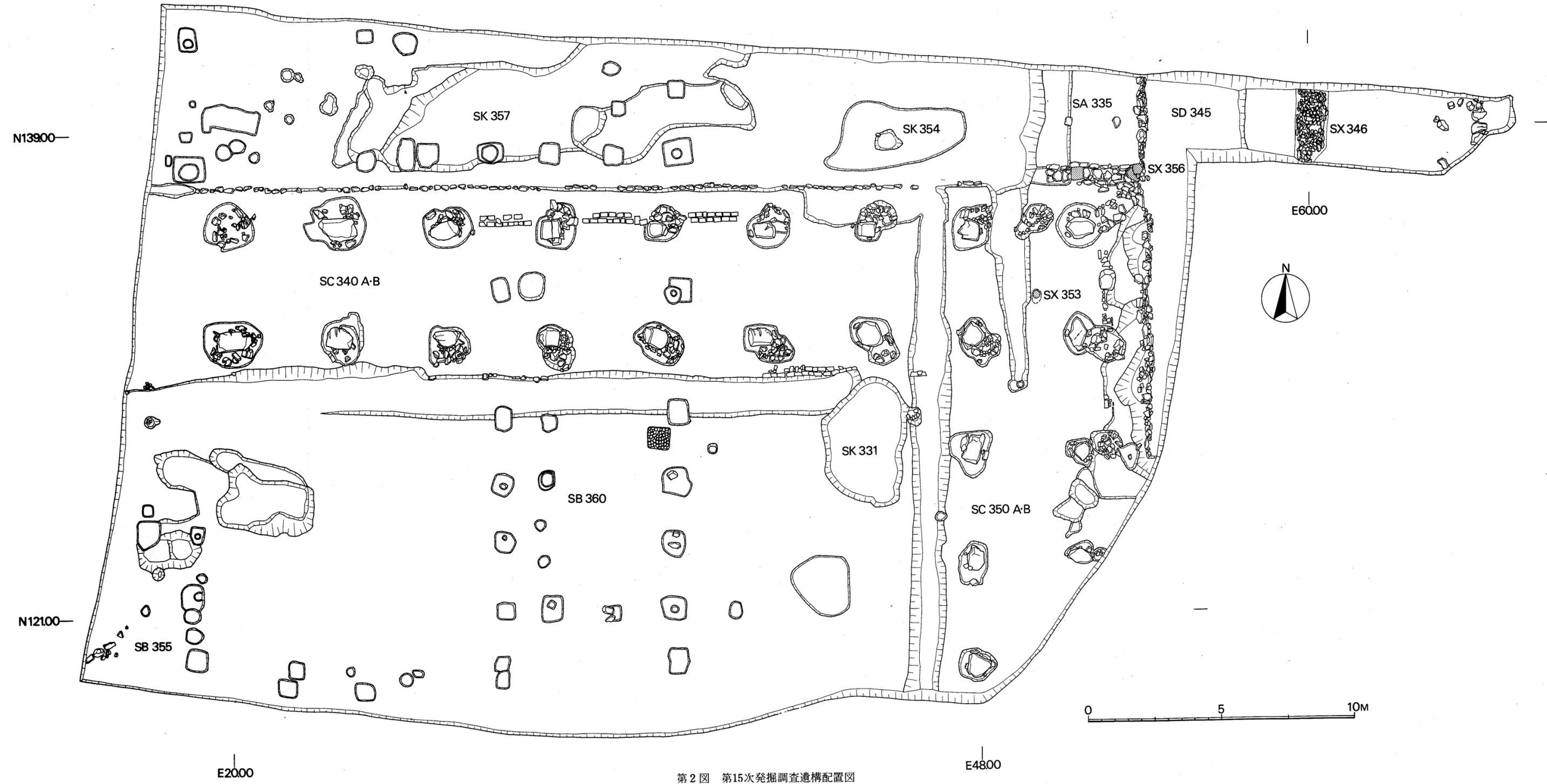
築垣の西側は攪乱をうけているため今回の調査範囲内においてはその規模を明確にすることができなかった。この築垣と回廊の接続部には暗渠が東西に設けられている。これは幅40cm、深さ30cmで自然石を使用しており、天井石はほとんど消失している。

石敷遺構 (S X 346)

調査地域東北隅の拡張区において玉石の遺構を検出した。東面回廊基壇側石から約5.5m東の所を南北にのびるものである。幅約1mで20cm前後の大きさの石を敷きならべている。道路様のものであると思われる。

掘立柱建物 (S B 355・S B 360)

発掘区西南隅と中央部において2棟を検出した。S B 355は1間×2間分を検出したのみで発掘区域外へのびている。柱間は東西方向6尺、南北方向8尺で、規模については不明である。発掘区域中央部において検出したS B 360はその半分ほどが回廊の下になるため一部柱穴を検



第2図 第15次発掘調査遺構配置図

出できなかったが梁行3間、桁行7間の南北棟である。柱間は梁行・桁行とも8尺である。ただ北の梁行方向の柱間が若干広くなることは検討の余地がある。この2棟の建物は柱穴の上を覆っている層から検出した土器からみて奈良時代前半のものと推定してさしつかえないであろう。

出土遺物

第15次調査で出土した遺物は瓦・土器・木器などがある。特に回廊の内側からはおびただしい量の瓦を検出した。またS K 331・S K 354・S K 357 からも多量の瓦と土器を検出した。軒瓦では軒丸瓦 274点・軒平瓦 253点を検出した。このうち軒丸瓦・軒平瓦とも鴻臚館式のもものがそれぞれ30%弱を占め最も多い。

文字瓦は約2000点が出土している。「園」「安楽之寺」「安」「賀茂瓦」「佐」「平井」などがある。これらの文字瓦は書体などからさらに細分できる。「安楽之寺」「佐」が最も多く、この2種類で全体の半数以上を占めている。

土器はS K 357、および掘立柱建物の上を覆う暗褐色の層から出土している。須恵器・土師器が最も多く上層からは青磁・白磁・黒色土器・中世陶器が若干出土している。特にS K 357から出土した土師器は回廊廃絶後のもので平安時代の一括資料として良好な資料である。

東面回廊の東の溝S D 345からは漆塗りで、返りのついた蓋が1点出土した。径17.5cm、口クロ挽きで中央にツマミがついている。外面は全面にわたって暗灰色の漆が塗られている。内面は腐蝕のため漆ははげている。

Ⅲ 第18次調査

第18次調査は現状変更申請による事前調査である。当該地は推定学校院跡のほぼ北辺中央部にあたり、すぐ背後には北から比高20mほどの丘陵がのびてきている。地番は太宰府町大字観世音寺 770番地である。

調査は最初幅3m、長さ17mのトレンチを東西に設定して行ったが、遺構の状況からさらに3m×8mほどを南へ拡張した。

検出遺構

遺構は層位的に上・下2層にわかれるが検出した主な遺構としては井戸1基で、このほかに径20～30cmほどのピット群・溝などである。

井戸S E 400 は円形の掘方で上部径 2.5cm、深さ 1.6m である。井戸枠は全て消失しており、その構造については不明である。ただ掘方と井戸枠との間に詰められた土が下部の方では方形を呈しており、これから推定して井戸枠は方形のものであったと思われる。上層は赤褐色の粘土で遺物をほとんど含んでおらず、そのひろがりからみて後世の整地と思われる。下層は暗灰色の粘質土と砂質土からなっているが、この土には須恵器、土師器がかなり認められた。これらの遺物からみて井戸の廃絶の時期を平安時代初頭頃におくことが可能と思われる。

出土遺物

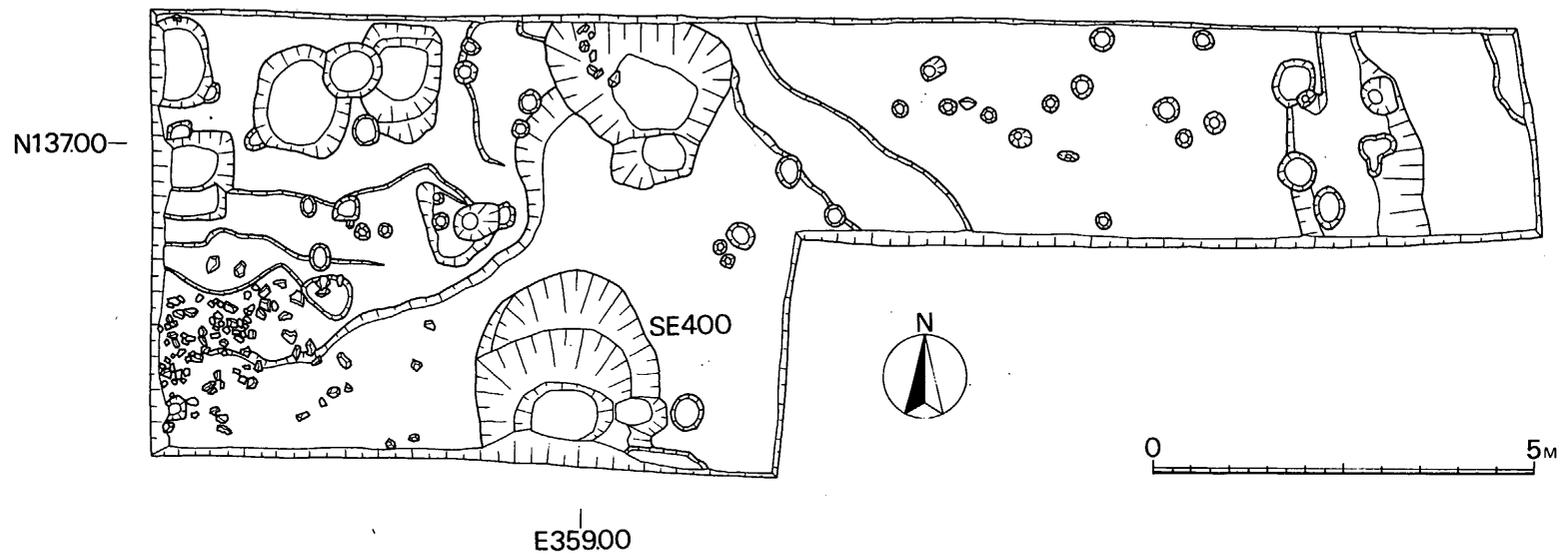
遺物は主に井戸埋土・井戸西方の礫敷上面および井戸の掘方が切りこまれている暗褐色の層から検出された。須恵器・土師器が主である。須恵器は高台付の坏および蓋が大半を占め、他に壺・高坏・甕などがある。土師器は皿および甕である。これらは全て奈良時代の後半から平安時代初頭にかけてのものである。この他瓦類では丸・平瓦と若干の軒丸瓦・軒平瓦および埴がある。埴には文様埴が2点含まれている。

Ⅳ 第19次調査

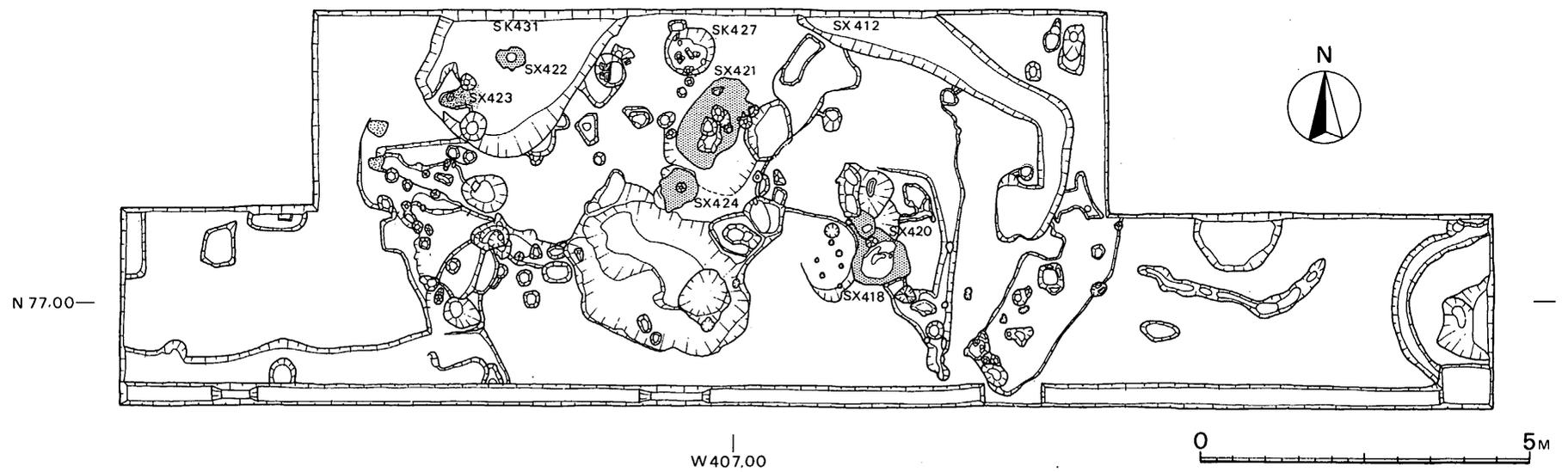
第19次調査地域は政庁中軸線から西へ約 400m 標高約38m の所で、蔵司跡西方の舌状台地である。このすぐ西には、従来より蔵司西瓦窯跡として瓦窯7基が確認されている。地番は太宰府町字来木 431-1 番地である。

この地域のすぐ東の谷の部分では第4次調査によって、東西方向に延る築地跡を検出してい

註4



第3図 第18次発掘調査遺構配置図



第4図 第19次発掘調査遺構配置図

る。したがって今回の調査においては、政庁の西を画する遺構の存在を予想し東西に3m×18mのトレンチを設定し調査を開始し、途中、遺構の状況から、さらに北へ3m×12mを拡張し調査を行った。

検出遺構

調査の結果、当初予想した遺構は検出されなかったが製銅の炉跡と思われるもの、およびこれに付属する四角錐の遺構、カマド、土壙などを検出した。

炉跡 (S X 418、420、421、422、424、435)

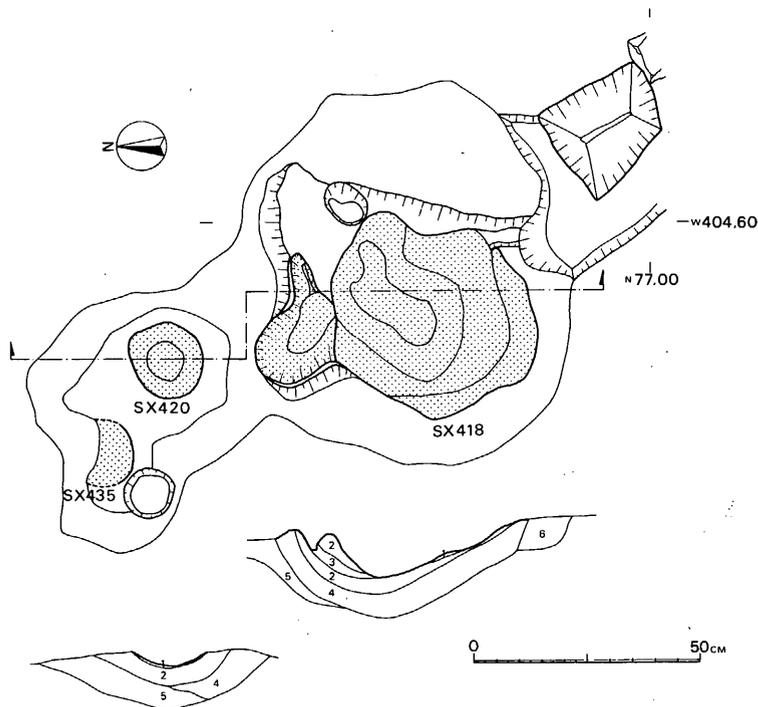
炉跡S X 418は径約90cmの不整円形のもので深さ約20cmの摺鉢状をしたものである。この底部および周辺には粒状の青銅鋳・鉄鋳が付着していた。炉は旧地表面をわずかに掘りくぼめ粘土を約3cmほど敷いている。この粘土は高熱をうけ青灰色を呈している。このすぐ南に四角錐状の遺構を検出した。一辺が約20cmのもので、壁面は粘土で造られ、硬く焼けている。この底には砂・青銅・鉄鋳の粒状のものが残存していた。

SX 420は径約20cm、深さ5cmの小整円形でこれもSX 418同様底部に青銅・鉄鋳の粒状のものが付着していた。

S X 421は長径180cm、短径140cmの不整長円形で周囲には黄色の粘土を置いている。内部には焼土・炭化物が混在している。

SX422は径40cmの小さなもので炉壁の左右に鑊羽口を挿入したと思われるくぼみを検出した。また炉壁は青灰色に焼けており内部には炭化物、青銅鋳が残存していた。

SX424はS X 418



第5図 炉址遺構実測図

よりはや、小型のもので、径60cm、深さ15cmの保土穴状のものである。壁面、底部には青銅・鉄鍍が認められ炉壁には鞆羽口の挿入部分と思われるくぼみが認められた。S X 435は大半が攪乱を受けており、炉壁の一部を検出したのみである。

カマド (S X 423)

不整長方形の竪穴状遺構S K 431の西南隅において検出された。竪穴状遺構の壁面に接して粘土で構築したもので高熱のため赤化している。内部から須恵器(坏)一点を検出した。

出土遺物

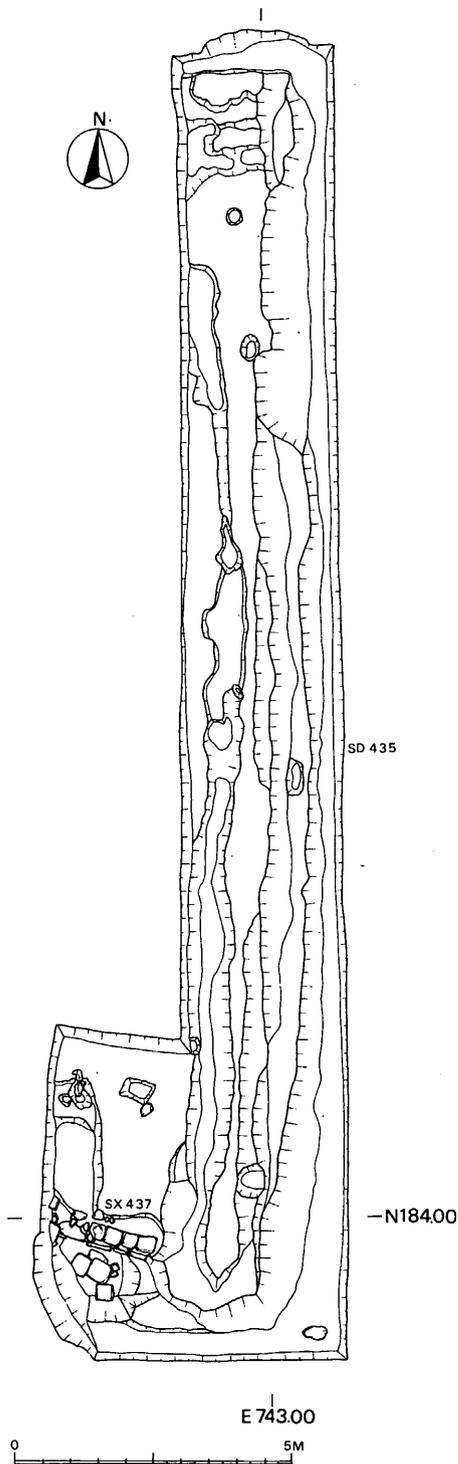
第19次調査における出土遺物は青銅鍍・鉄鍍・鞆羽口・坩堝をはじめ少量の須恵器・土師器等である。これらは主に炉跡周辺、土壙(S K 427)から出土した。

瓦は軒丸瓦1点のほか丸・平瓦がほとんどで「佐」「安楽之寺」の文字瓦を若干含んでいる。土器はほとんどが細片であるがS X 423から出土した坏はこの遺構の時期を想定しうる唯一の資料である。

V 第20次調査

第20次調査として観世音寺東北地域を調査した。この地は観世音寺寺域を方三町とした場合に観世音寺の東を画する築地の推定線上にあたる地域である。政庁中軸線から東へ約749mの地点であり、地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字朝日13-1番地である。

調査地域に南北および東西のトレンチ各1を設定し調査を行なった。調査の結果南北トレンチにおいて南北方向の「溝状の落ち込み」と石垣の一部を



第6図 第20次発掘調査遺構配置図

検出した。今回の調査では観世音寺を画する築地等の遺構については明確でなかった。

検出遺構

溝状の落ち込みS D 435は政庁中軸線から東へ約 750m に位置し、ほぼ7町の線に近い距離であるが、観世音寺寺域との直接の関係は明確にし得なかった。

南北トレンチの南端で検出した石垣S X 437は、S D 435の西側の高まり（S D 435の低い所とのレベル差は50～60cmである）の南を限るもので、護岸のために積まれたものである。この石垣は正東西方向からや、北にふれているが、四段積みのがっしりした石垣である。この石垣は花崗岩の切り石で、石の面をそろえて積まれており、高さは約1mである。切り石の一つには五輪塔の一部を転用していた。石垣の南側は深い落ち込みとなっており暗灰色のやわらかい土が堆積していた。現地形では発掘地の南側は約2m程低くなっており、今回検出した石垣の南側の落ち込みとの関係が考えられた。石垣で土溜めをしたこの高まりの一部には建物の存在が推測されたが今回の調査ではそのほとんどが発掘地域外であるため確認できなかった。またこの石垣は西へ延びる可能性は十分考えられ今回検出した遺構はその一部であり、今後隣接地の調査で明らかとなろう。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土器・瓦および中世陶器である。主に石垣S X 437の南側落ち込みと溝状の落ち込みS D 435から発見した。土器は土師器の坏および皿の類で底部に糸切り痕をもつものであり、鎌倉期後半～室町期にかけてのものと考えられる。

VI 第21次調査

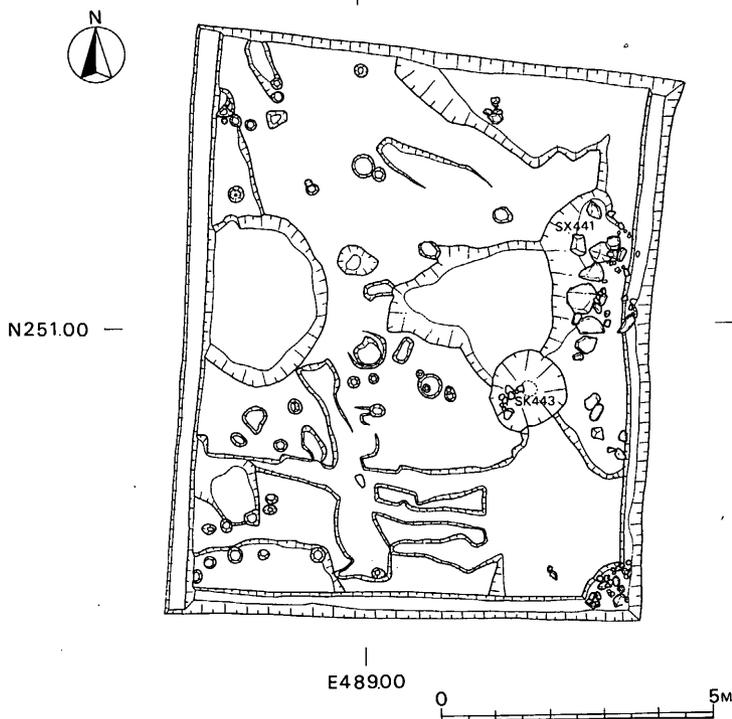
住宅建築にともなう事前調査で約150m²について調査を行なった。調査地域は政庁中軸線より東へ約 500mの地点で、地番は、太宰府町大字観世音寺字安養寺812-4番地である。この地域は、旧観世音寺寺域の西北隅にあたる地域である。

検出遺構

調査の結果、上下二層の遺構面を検出し、上層からは石組遺構およびピット群を、下層からは、玉石溝、柱穴およびピット群を検出した。

上層遺構

上層遺構面では、ピット群と土塹、石組遺構を検出した。



第7図 第21次発掘調査遺構配置図(上層)

石組遺構 (SX441)

土壁内に挙大から頭大の石を円弧状に配している。これらの石の中には赤化したものがあり、火を受けたと思われる。壁底南側では炭化物が検出されている。上層遺構の性格は不明である。

下層遺構

下層では、ほぼ南北に走る玉石溝、その西に根石と思われるもの、および小ピットを検出した。

玉石溝 (SD460)

ほぼ南北に走る溝で、側石は花崗岩を使用している。最も残存状態の良い中央部で副約75cm、深さ約45cmをはかる。溝は北から南へ向かってゆるやかに傾斜している。溝埋土に含まれる土器は型的に殆ど差が認められず、この溝は短期間のうちに埋没したものと思われる。

溝の側石は、西岸北端部の石1個、および東岸北端の石が他の石と異なって、東西方向におかれており、北端部で溝は西に折れるものと考えられるが、溝北半部は攪乱されており、またトレンチ西壁の土層の観察によれば溝らしき痕跡は認められなかった。したがって、この溝は北端部で完結したものか、あるいは西に折れたとしても、トレンチ西壁に達する以前に完結したものと考えられる。

建物跡 (SB456)

礎石が1個残るだけで、他は掘り方内に根石を残すのみである。柱間は五尺等間である。本調査では東西、南北に各々1間分しか確認できなかったが、トレンチ南半部は削平されており、本来は、南および西の発掘区域外へ広がるものと思われる。

ピット (S X 453—S X 455 S X 457—S X 459)

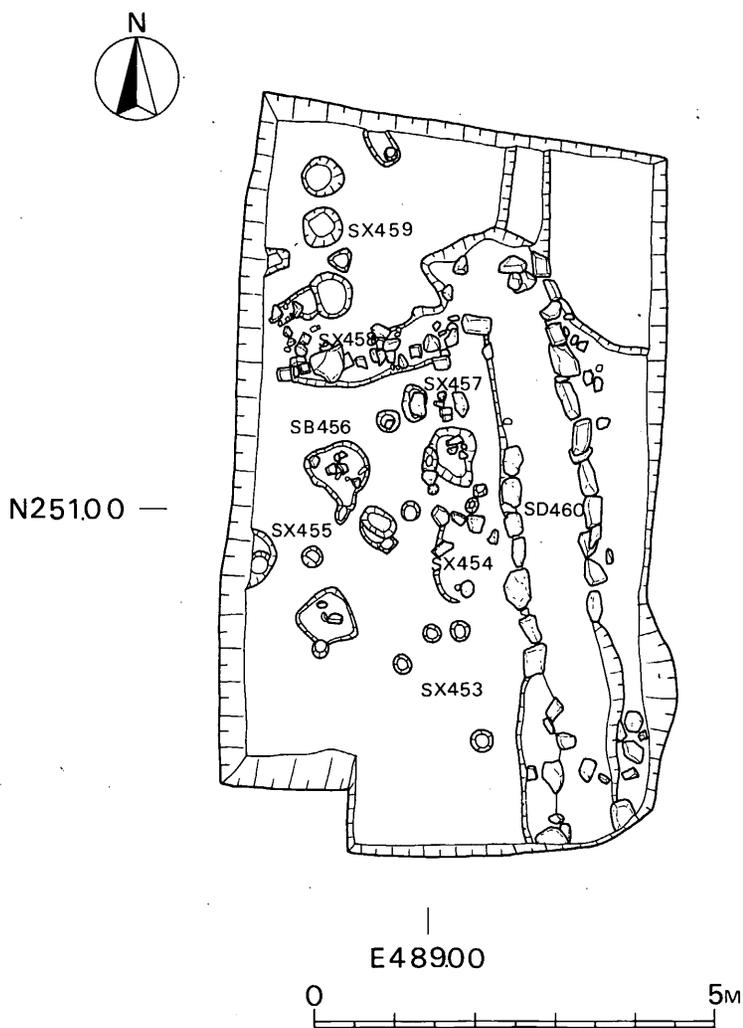
これらのピットは、建物跡S B 456とどのような関係にあるのが明確でない。ただ、S X 454だけはS B 456に伴う根石の可能性はある。

出土遺物

上層では、土器・瓦・土鍋片・埴および宋銭が出土した。土器は小破片である。総じて出土遺物は少ない。

下層ではトレンチ中央部を中心に、多量の小皿・坏など完形の土師器および磁器片が出土した。土師器はすべて糸切底であり、遺構面をおおう炭化物が混入した暗灰色土の中に含まれていた。他に同一層位から、完形の青銅製高台付鏡、用途不明の青銅製品、宋銭、石鍋等が出土した。

出土遺物より、上層は室町時代、下層は鎌倉時代のものと思われる。

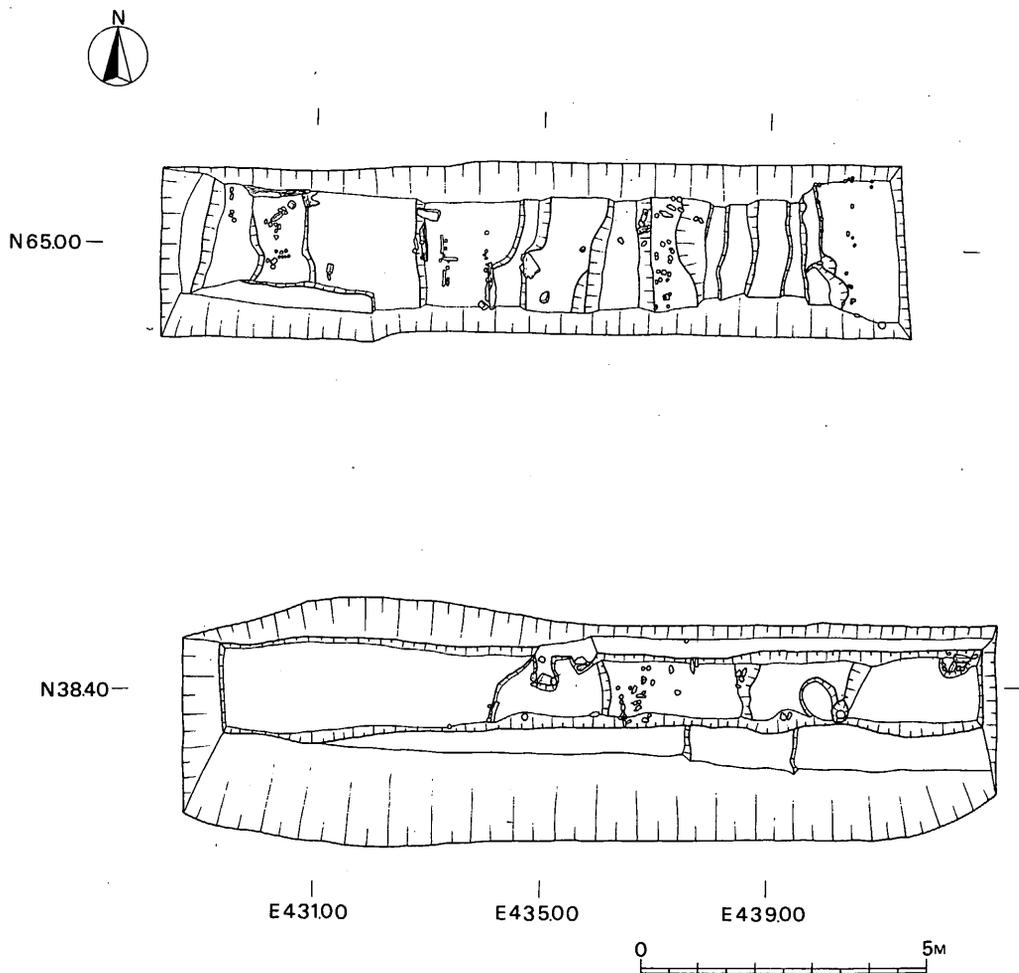


第8図 第21次発掘調査遺構配置図(下層)

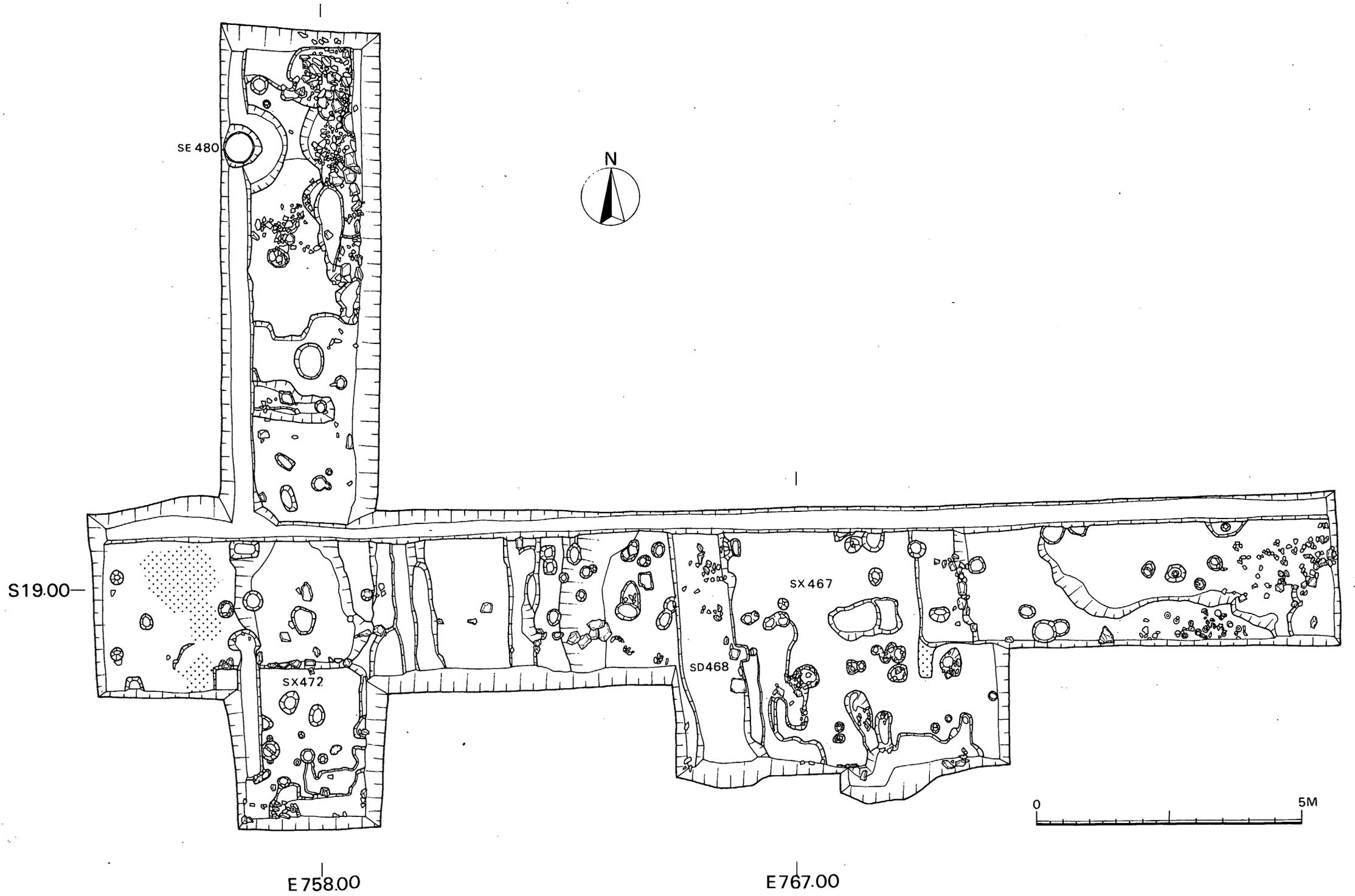
Ⅶ 第22次調査

第22次調査は住宅改築にともなう事前調査である。調査地域は県道吉木・関屋線に接した推定学校院跡の東南隅にあたる。地番は太宰府町大字観世音寺字学業院203-3番地である。今回調査地の北約30mの所では第9次調査において南北方向の溝を検出している。したがって、この溝の南延長部が検出されることが予想された。

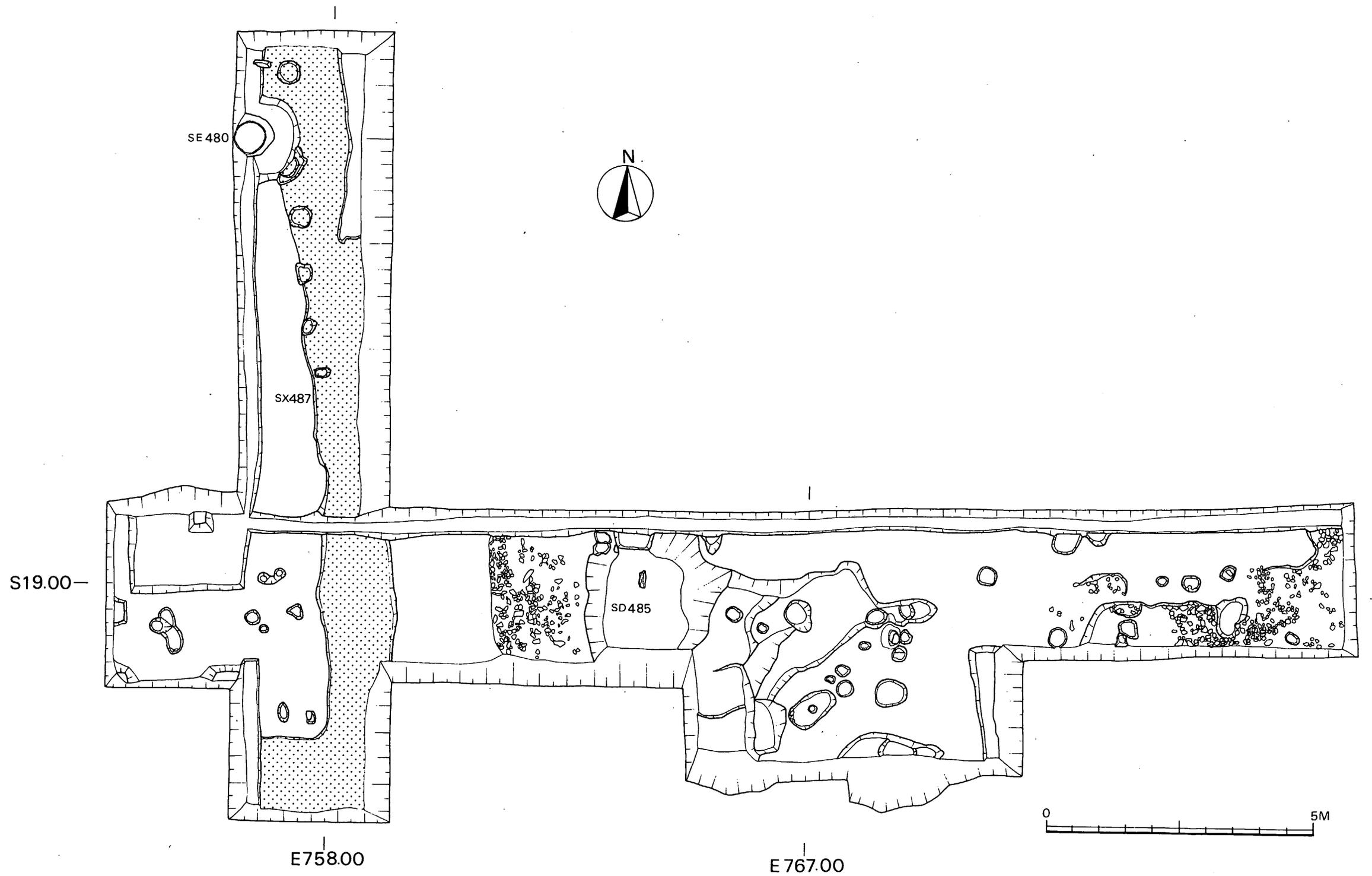
調査は東西に幅3m、長さ14mのトレンチ2本を27mほどへだてて設定して行った。



第9図 第22次発掘調査遺構配置図



第10図 第23次発掘調査遺構配置図（上層）



第11図 第23次発掘調査遺構配置図(下層)

検出遺構

調査の結果は当初の予想どおり南北方向の溝を検出した。すなわちAトレンチでは南北にのびる杭列が認められ、この杭列から判断すると少なくとも3本の溝が通っている。Bトレンチ西半部は、この杭列が全然認められず東半部に一列の杭を検出したのみである。またA・Bトレンチとも、この溝と思われる道構の上面に黒灰色の粘質土が全面にわたって堆積しており、氾濫の様相を示していた。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土師器・青磁・白磁・瓦および若干の木製品である。土師器の大半は糸切り底坏と小形の皿であるが溝の下層では、へら切り底のものが混在している。青磁・白磁の出土量はかなり多いが竜泉窯のものが目立って多い。瓦では軒先瓦を若干検出した。木器では下駄・椀がある。

Ⅷ 第23次調査

第23次調査として観世音寺東南地区を調査した。この地は先に調査した第5次調査地の東に隣接した地域で、政庁中軸線から東へ約762mの距離のところである。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字露切74-1番地である。

今回の調査は第5次調査で検出した築地および石組遺構との関係および観世音寺旧境内に接した地域を明らかにすることにあつた。

調査地に南北および東南にトレンチを設定し発掘調査を行った。

検出遺構

調査の結果2層にわたって遺構を検出した。上層遺構として、井戸1基と築地状高まりを、またこの西側で南北の溝1を検出した。下層遺構として南北に細長い礫群と南北溝を検出した。

上層遺構の東西方向の築地状の高まりSX 472は第5次調査によって検出した築地と位置的にや、北にずれており、また石組遺構については道路面の下になりこれを確認することができなかった。南北方向のSX 467は第5次調査検出の旧期の築地との関係も考えられたが、これを明らかにすることはできなかった。南北トレンチ北端で検出した井戸SE 480は円形の桶側の井戸であり、保存状態は悪く最下段の桶側がわずかに残存しているのみであつた。井戸桶側の直径は約60cm、深さは遺構面から約1.3mであり鎌倉期のものと考えられる。井戸中から多くの「箸」が出土した。

下層遺構では南北トレンチの東側よりで南北に細長くのびる礫群 SX 487 を検出したがその性格については明確ではなかった。このSX 487は部分的に溝状の掘方らしきものがあり、その中に礫がつまった状態であった。この礫群は南端で西へ折れ曲がっている。

SD 485は幅約2.2m、深さ 0.5mで、暗灰色の粘土が推積しており最下底には植物の腐植したものが推積していた。SD 485 は南北へ更に伸びるものかどうかは明らかにできなかった。

出土遺物

出土した遺物は土器・瓦・木器・宋銭でありその量は多く現在整理中である。土器は糸切り底をもつ土師器の坏・皿類で最もその量が多い。これらに伴って宋銭がかなり出土したが腐蝕が激しいため詳細については不明である。木器は井戸SE 480からと南北溝SD 485から出土した。製品は、箸と鋤先である。これらの遺物は鎌倉期のものと考えられる。

Ⅸ 第24次調査

第24次調査は政庁北西部で行った。この地域は四王寺山から南へのびる比高70~80mの舌状台地にはさまれた比較的高燥な所で標高45mで現在は水田となっている。今回調査を行った所は周囲の水田よりも約1~1.5mほど高くなっており、南方約30mの所には軸ズリの穴のある礎石が一個残存している。

地番は太宰府町大字観世音寺字大裏 507-2 番地である。調査は東西10m、南北60mの約 600 m²について行った。

検出遺構

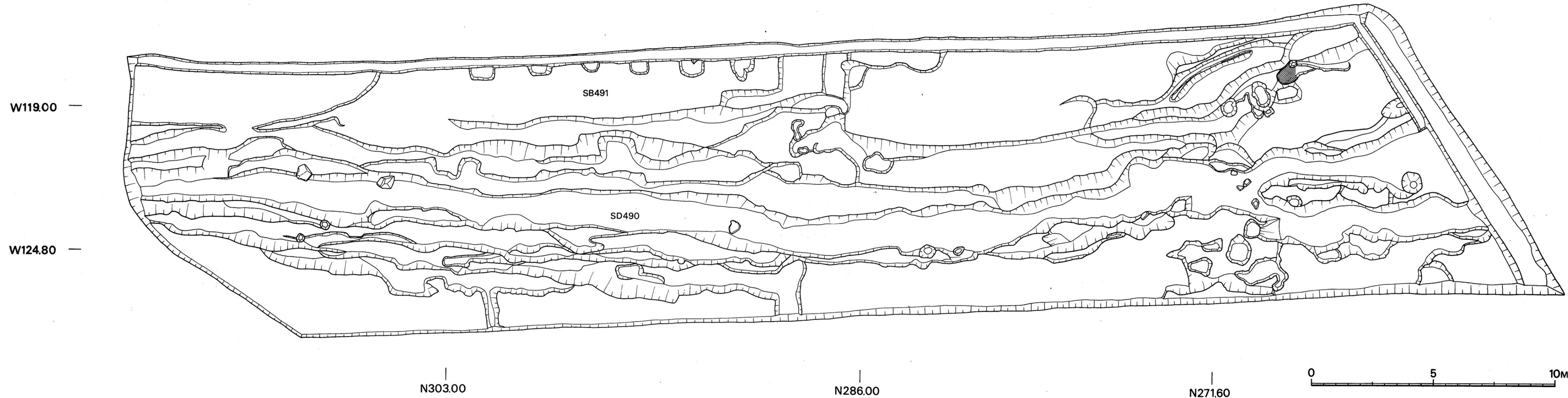
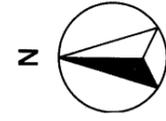
検出した主な遺構は溝1条、掘立柱建物1棟である。

溝 (SD 490)

発掘区域の中央をほぼ南北に流れるもので最北端部では幅約2m、中央部では4mほどである。南半部は後世の整地が約1mあり、地形的に低くなっており、溝は大きく広がっている。全体的に溝の両肩は明確でなく、杭列などの護岸の設備も全くないところから人工の溝とは考え難い。この溝の埋土は大きく二つに分かれ上層は鉄分を含んだ暗褐色の砂質土であり、下層は拳大の礫を含んだ灰色の砂である。このいずれの層からも糸切り底の土師器・青磁・白磁・瓦を検出した。

溝の埋土から検出される遺物には、ほとんど時期差が認められないところから、短期間に埋まったものと考えられる。

掘立柱建物 (SB 491)



第12図 第24次発掘調査遺構配置図

掘立柱建物 (S B 491)

発掘区東辺部において南北方向に5間分の柱穴を一例検出した。全体的に削平されており柱穴は深さ20~30cmである。柱間は7尺等間である。この建物は発掘区域の西方へのびているため規模等については不明である。柱穴の埋土から出土した土器から判断すると奈良時代後半を下らないものと考えられる。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は瓦・土器である。これらは主に溝S D 340の埋土から出土した。瓦は軒丸瓦15点、軒平瓦5点のほか「佐」・「平井」の文字瓦が出土している。土器は須恵器・土師器・青磁・白磁および中世陶器などである。土師器は糸切り底のものが多く、上層からは青銅製の懸仏(長さ5cm)が1点出土している。

X 第25次調査

第25次調査として月山の南側、県道吉木一関屋線の南に接する地点の調査を行なった。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字日吉 252番地である。この地は条坊復原による左郭の5条2坊の地に推定される地域である。この地点は政庁中軸線から東へ約216mの距離にあり、ほぼ2町の推定線上にあたる。今回の調査の目的もこの2町の線を描く溝等の遺構検出にあった。

調査の結果はかなりの厚さで砂の堆積がみられるのみで遺構らしきものは存在しなかった。この地は従来水田であり、現地形は西から東へ階段状に低くなっており、今回の調査地域はこのいちばん低い場所にあたる。現在、調査地の東に接して細い川が流れており、現地形より判断して遺構の存在は余り期待できなかった。

調査は県道に沿って幅3mのトレンチを設定し、耕土・床土を除去した段階で、さらにトレンチの南側に巾1.5mの側溝を設けて表土下2m程掘り下げた。その結果、厚さ約30cmの表土の下は砂と粘土の層が互層になって堆積しており、2町の線を描く溝等の遺構は検出できなかった。

発見した遺物は耕作土および床土から少量の土器片と瓦片が出土したのみでその下層の砂および粘土の層からは1点も出土しなかった。

- 註1 福岡県教育委員会 大宰府史跡一昭和43年度調査概報一 1969. 3. 31
註2 福岡県教育委員会 大宰府史跡一昭和45年度発掘調査概要一1971. 3. 31
福岡県文化財調査報告書 第47集
註3 東面回廊と重さなる隅の部分を含める。
註4 註2に同じ
註5 福岡県教育委員会 大宰府史跡一第9.10.11次発掘調査概要一1971. 9



図版 1

上 第15次発掘調査
地域全景 東から

下 SA335 築地 南から
SX356 暗渠



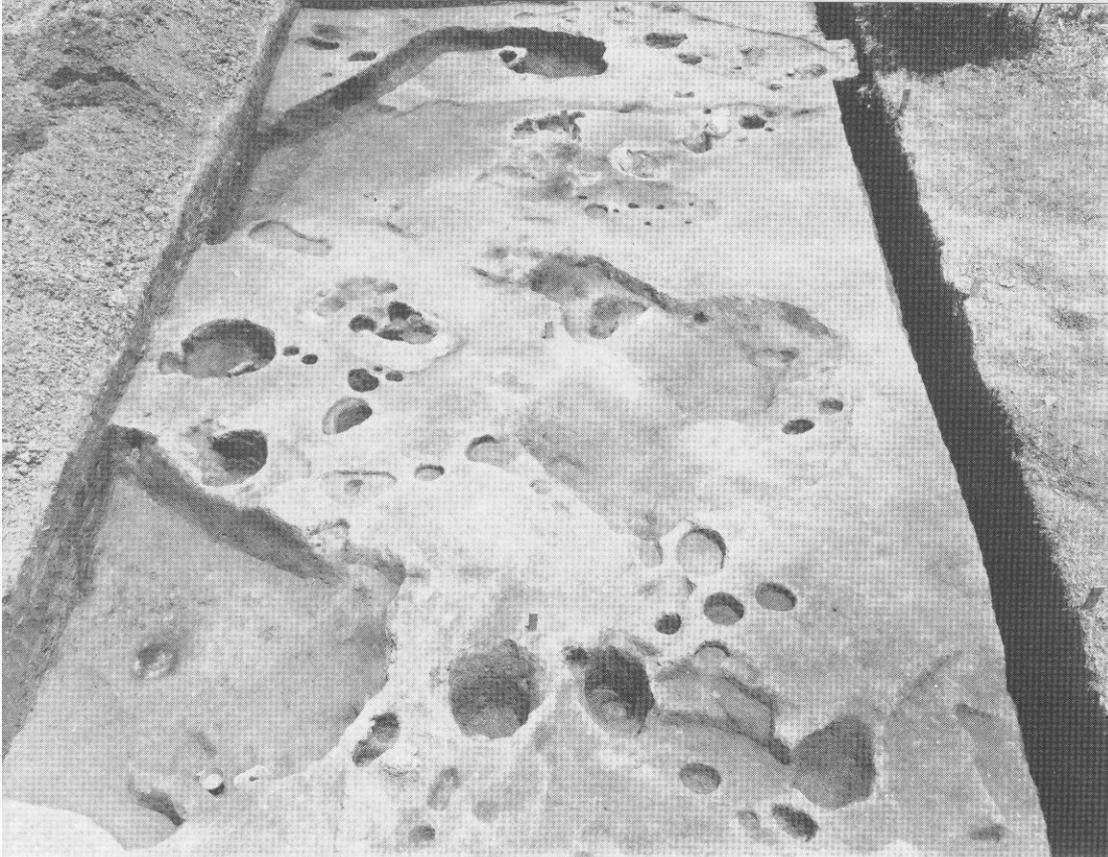


図版 2
上 SC 350 A・B
回廊 北から

下 SB 360
掘立柱建物
南から



図版 3 上 第18次調査地域全景 西から 下 SE400井戸 北から

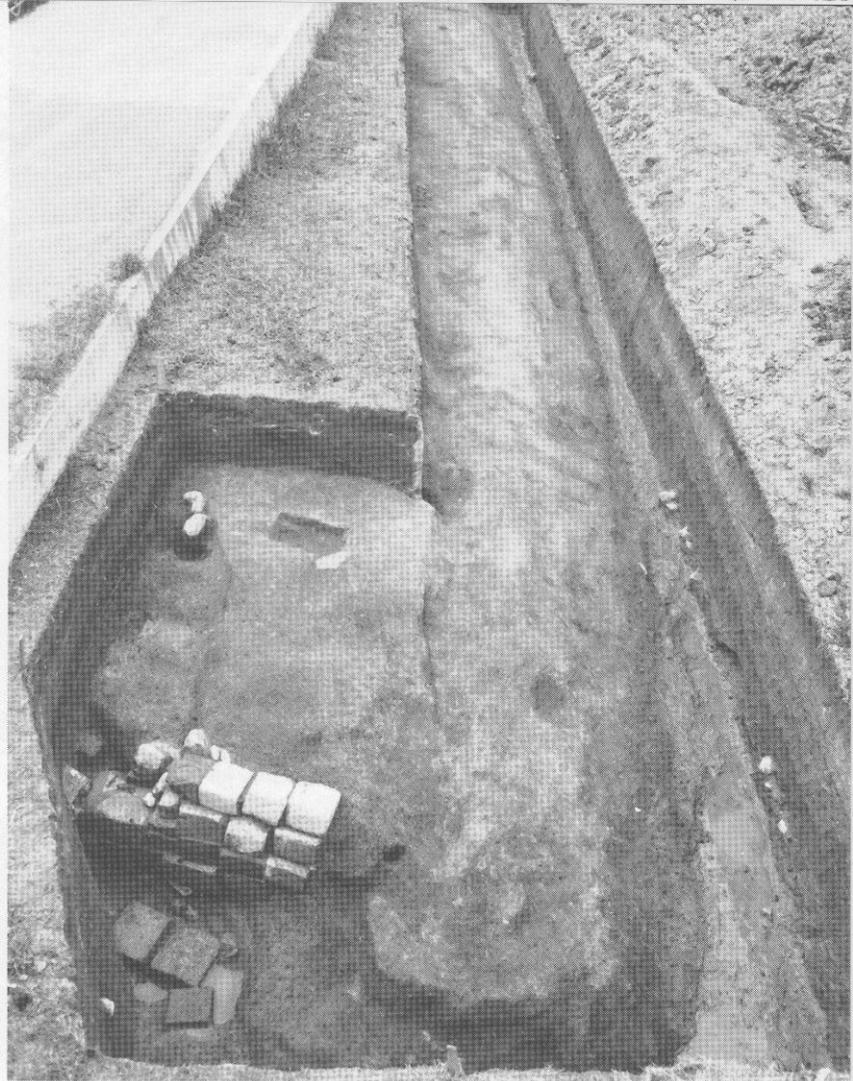


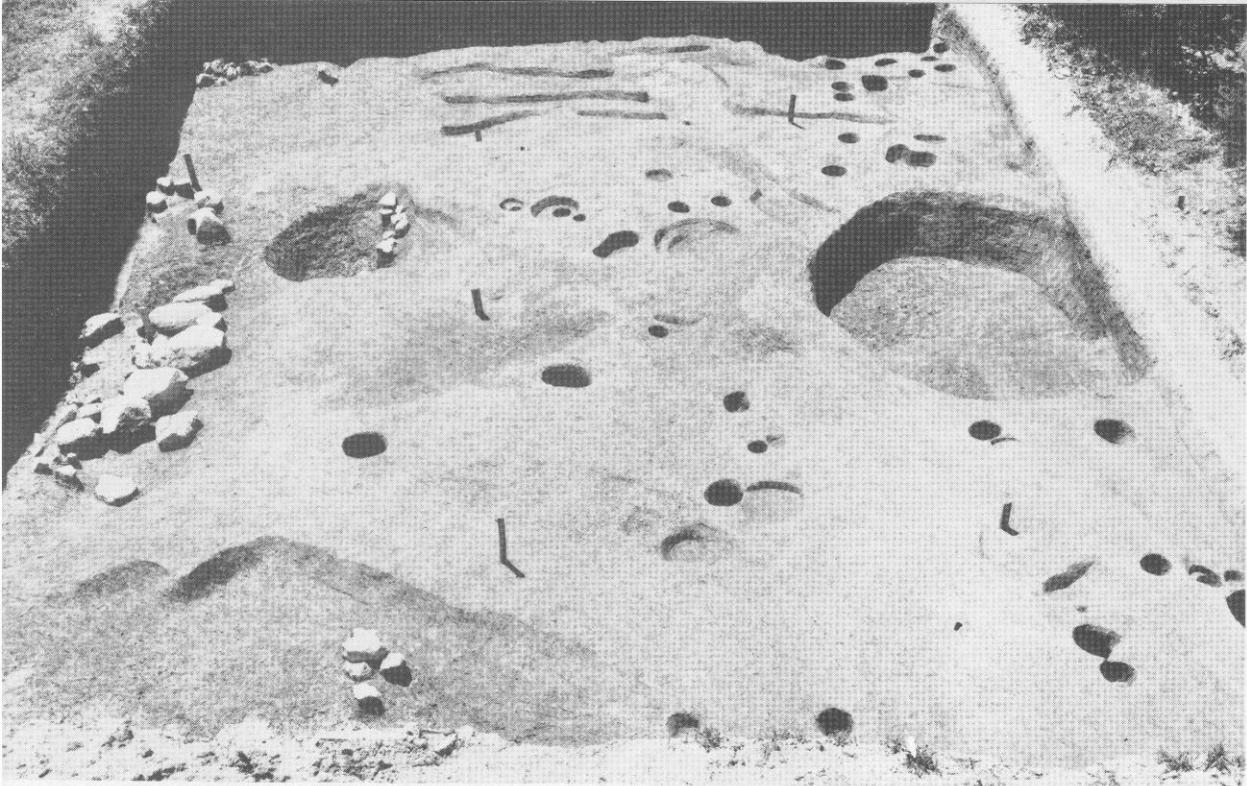
図版 4 第19次調査地域全景 西から 下 SX418炉址 東から

図版 5

上 第20次調査地域
全景 南から

下 SX437 石垣
南から



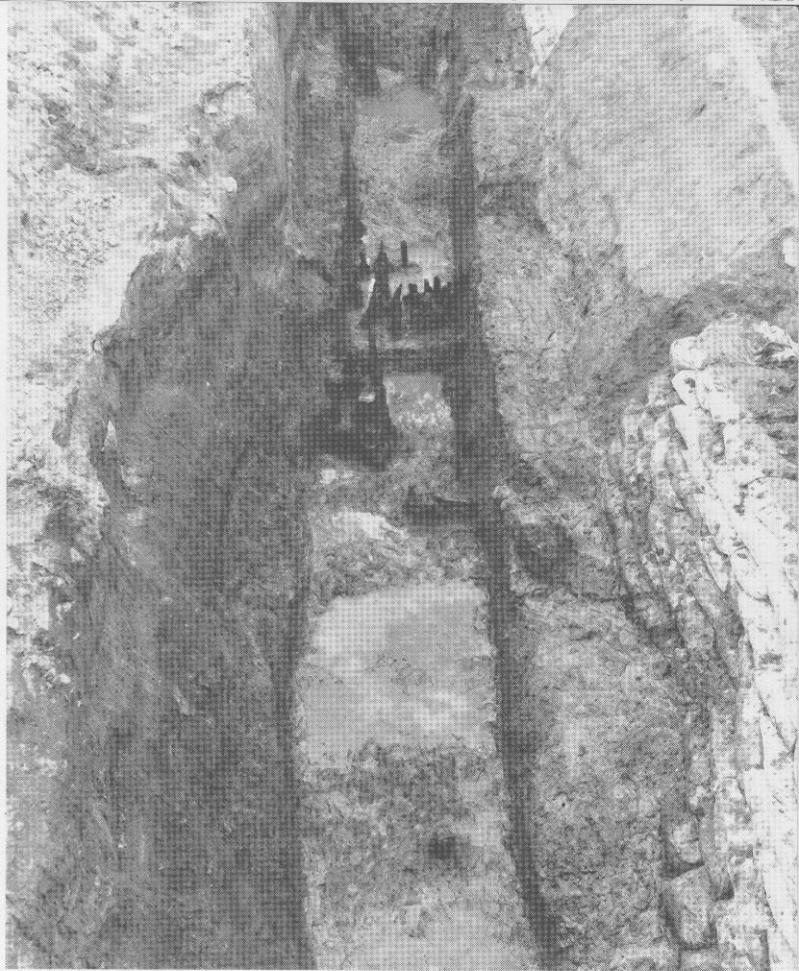


図版 6 上 第20次調査地域全景(上層) 北から 下 第20次調査地域全景(下層) 北から

図版 7

上 第22次調査地域
全景(Bトレンチ)西から

下 第22次洞壺地域
全景(Aトレンチ)東から



図版 8

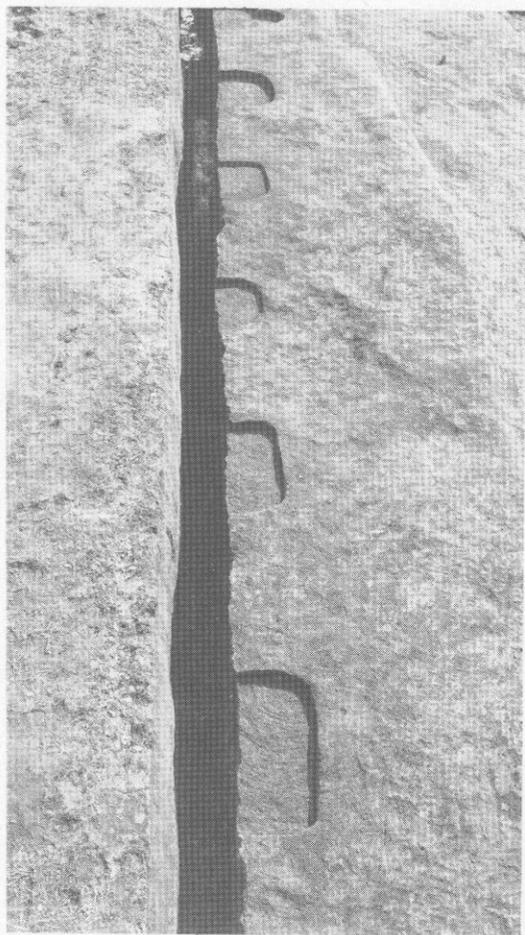
上 第23次調査地域
全景(上層) 西から

下 第23次調査地域
全景(下層) 北から

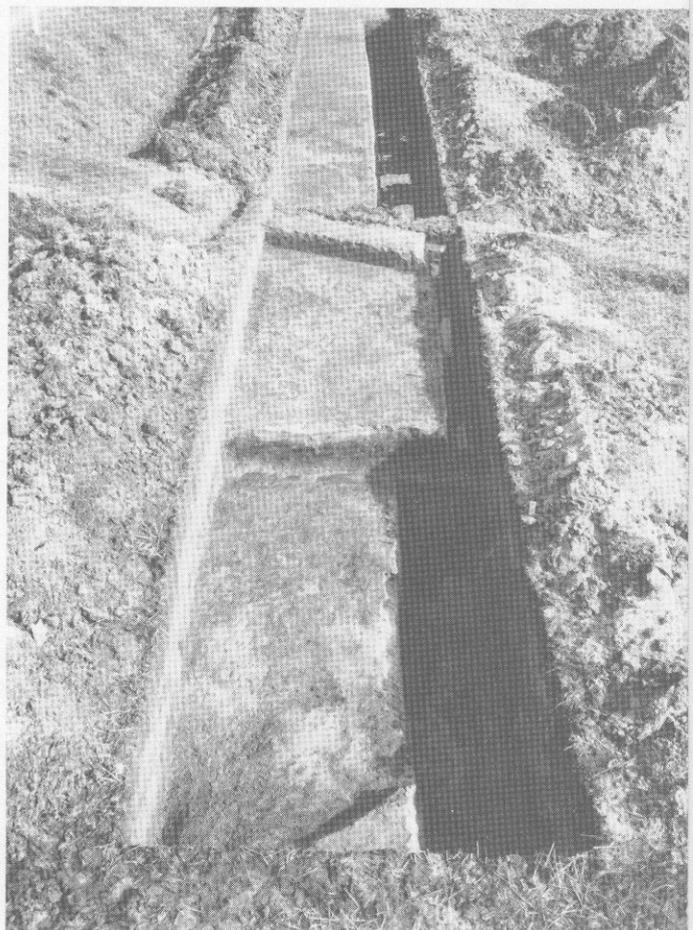


図版 9

第24次調査地域
全景 北から



第24次調査
S B 491 掘立柱建物 北から



第25次調査地域全景 西から

大宰府史跡
昭和47年度発掘調査略報

昭和48年3月

発行 九州歴史資料館

筑紫郡太宰府町大字太宰府字太郎左近1025

印刷 福岡印刷株式会社

本稿は下記のもの分担して執筆した。

九州歴史資料館

石松好雄・横田賢次郎・高橋章・児玉真一